メール宅急便「寄 稿」

写真寄稿　21期　栂　睦美

モデル（手）21期　大野直子

2004年初夏　ニッコウキスゲが寂しげに咲くある山頂にて

「福井県民は山頂で、ボーボー、バーナーに火を付け、焼き肉をよくやらかす」

「富山県民は、おかずにカップラーメンやメッタ汁なんかを作る」

「はてさて、石川県民は、おにぎりだけでよいのか！（憤慨）」

「いやいや。20期久冨さんなんかがいれば、ワインパーティもありですぞ～」

半世紀越しの飯豊山

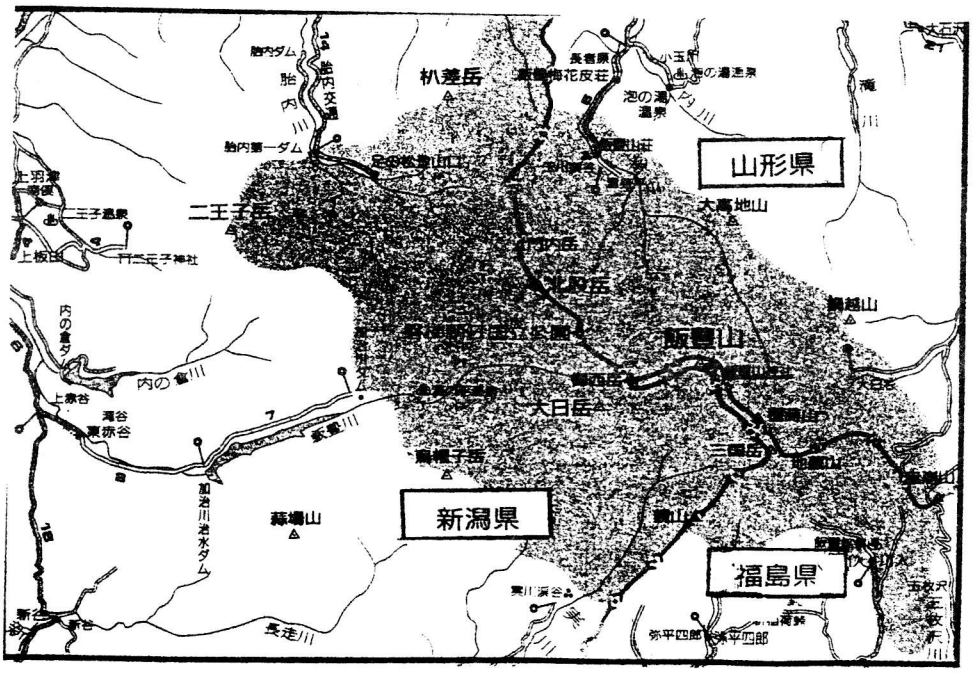
6期　合津　尚

飯豊山は白山と同じく信仰の山である。山頂は山形・新潟県に挟まれているが吾が故里福島県領である(添付地図参照のこと)。この勢力範囲は戦国期・会津藩の元祖蒲生氏郷の時代に、山岳修行の山伏が蒲生氏の寄進で 2,105 Mの山頂に神社を建立したのがそもそもの起因とか。会津側からの登山道がこの神社へのアクセスとして権利が残り、明治に入ってから県境確定においても敵であった薩長政府のもとで、会津藩から福島県に引継がれたのが奇跡であった。

古来、各種の生物は縄張り争いというＤＮＡを引きずっており、この変則的な境界を巡ってもその後三県で紛争が続いた。

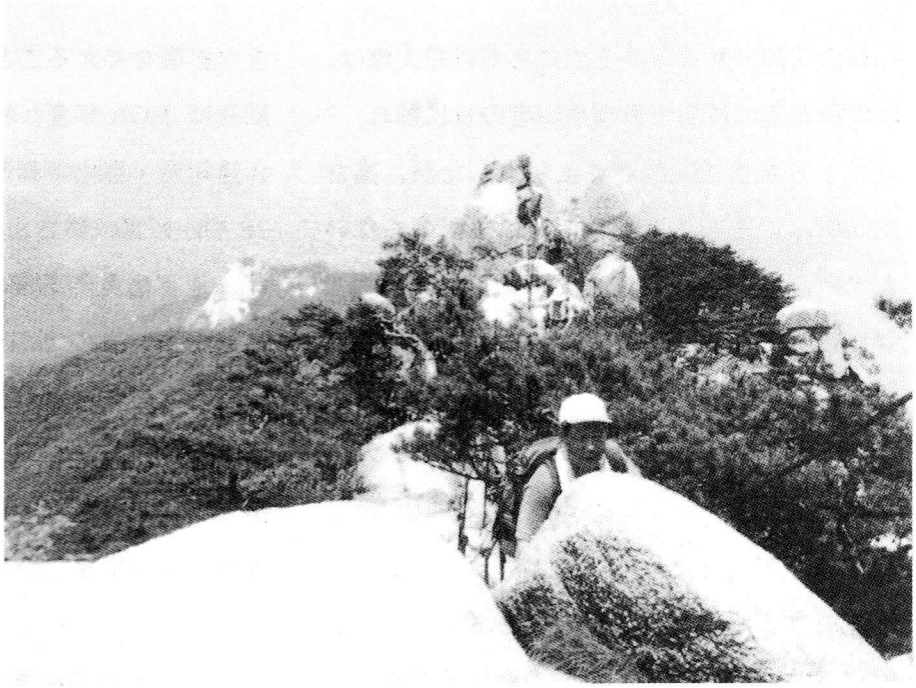
さて前置きが長くなったが、この山に登る計画が最初にあったのが高２のときであったから、今からおよそ５０年前の夏である。天候か受験競争の由かは失念したが中止となったままになった。昨年、７年に及ぶ岩手県釜石と東京の二重生活の間に主な東北の山は登ったので、昔の仲間とこの山に挑戦したが、悪天候や諸々の事件で中途半端に終わってしまった。

今年こそはと準備万端整えて梅雨明けを待ち、７月２３日から出入り５日間で山形県側から会津に 2,100 M級の北股岳・大日岳・飯豊本山と縦走しが、残念ながら有名な大雪渓は春からの異常気温で痩せ細り入渓禁止であった。その後の新潟県での雪渓崩落事故を思うと無理をする歳でもないし、二重生活も終わりそうでヤレヤレである。



北漢山・トボン山（韓国）山行

９期　山中重夫



元気に鎖場を行く山中さん。ふだんの八王子での生活では、金沢が舞台のテレビのサスペンス劇場などは必ず見ていてくれるそうです。

ソウル山岳連盟からのお誘いを受け、東京都山岳連盟の２０数名の一員として２００４年６月３日~６日までとして韓国の２つの山行報告をします。

いずれの山も 800 メートル程度の山で日本では、六甲・高尾山程度の山でソウルの近郊で地下鉄での日帰り参考が可能な山である。しかしその山様は、日本と全く異なり巨大な岩稜で覆われている。それ故道は、急登で随所に立派な鎖が付けられ標高以上の苦労があった。北漢山の横にはインスボンという韓国のクライマー垂涎の岩山があり頂上からクライミングの様子が手に取るように見える。また、山の中腹には、お寺や、万里の頂上を小型にしたような城壁が続き、山頂には韓国旗がたなびいている。

また、これらの山域は、国立公園であり登山口は、市民の憩いの場として整備され山用品の店が多く並び、山域全体が禁煙で喫煙が見つかると処分を受けるとのこと。

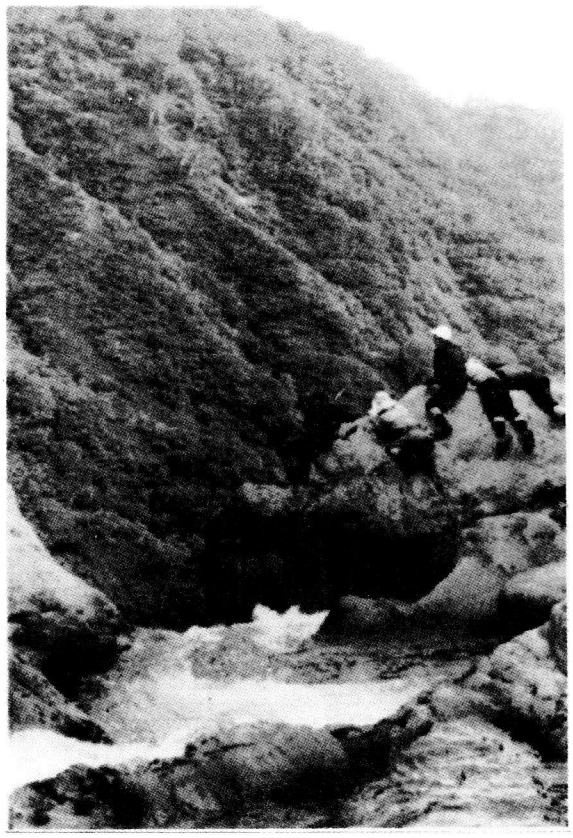
また、韓国の若者の間では、大変な登山ブームでソウル市内のある一角では、登山用具専門店が店を連ねていた。我々の団体が平均年齢６０歳を超えていた事に、ソウル山岳連盟は、恐らくビックリしたに違いないが、日本でいう「山渓」の取材も受け写真も掲載されるとのこと。

姿を変えた百四丈滝（ひゃくよじょうのたき）

15期　上馬康生

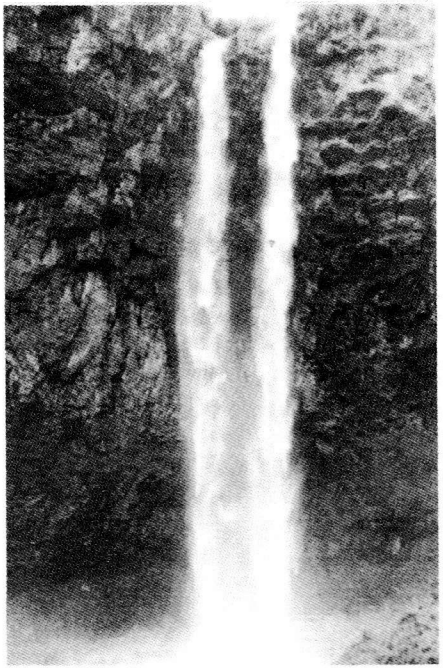
白山北部の丸石谷川上流にある百四丈滝は、加賀禅定道の復活で再び登山者の目に触れることとなり 20 年近くたちましたが、高さ約 90 mのその雄姿を見た人はまだ多くないと思います。その滝の落ち口へ、2004 年 8 月 2 日に行ってきました。メンバーは 11 期の森川 功さんと A.Y さんとの 3 人で、私としては今回で 5 回目の訪問でした。

振り返れば、大学 1 年の 1970 年秋、はじめての PW がここでした。リーダー 11 期の加藤忠好さんに森川さん、高田訓子さん（13 期）、矢津早苗さん（14 期）、南保昭雄君（15 期）との 6 人でした。その後の私の山行に大きな影響を与えることとなった PW でした。2 回目は 1973 年夏、私がリーダーで、17 期吉田憲司君・恵比寿泰子さん・川瀬さと子さん、18 期川西喜代美さん・黒田伸之君の 6 人でした。地下足袋に草鞋の沢歩きの格好で、滝の落ち口の大岩の上から滝の下をのぞき込むメンバーの姿が思い出されます（写真 1）。3 回目は 1974 年、一人で滝の下から左岸をよじ登って滝の落ち口へ行きました。4 回目は加賀禅定道ができてから T.S 君と 2 人で行きました。



1973. 8. 7 滝の落ち口の大岩からのぞき込む

古白山火山の溶岩にかかる滝は、長い年月の間に何度か姿を変えたことと思われます。1785 年の金子有斐の登山紀行「白山遊覧圖紀巻之一」には、觀千丈瀑布。望東方草蒼靄中。石壁若擘。一條瀑布掛其際。とあり、そのころは千丈滝と呼ばれていて、流れが一筋であったと思われます。同じ作者の「白山史 五溪瀧譜」には千仭瀧として、一條白練‥とありますが絵図があり、滝は一筋のようにも見えますが、左岸側の大きな流れと右岸側に小さくて途中ですぐ前者と合わさって一筋となっているようにも見えます。辰口町所蔵の 1789 年に描かれた白山曼荼羅図には一筋の流れとして描かれています。白山を描いた画家、玉井敬泉の 1940 年の絵図には千仭ノ滝として、滝の上の大岩の両側に 2 筋の流れとして描かれています。左岸側が大きく、右岸側が小さく描かれています。どうやら百四丈滝と



1974. 7.28滝の下から

呼ばれるようになったのは、1900年代中ごろ以降ということになりそうです。私が知っている1970年から少なくとも1974年までは、落ち口の大岩で2つのほぼ同じ水量の流れとなって下っていました（写真2）。ところが加賀禅定道が再開された1987年には、滝はまた一筋となっていました（写真3）。4回目の訪れで、落ち口の大岩が落下して無くなり、流れが一筋となったことがわかりました。

私の推測では、初め一筋の滝であったのが、流水などに削られて右岸側に小さいもう一筋の流れができ、やがて少しずつ岩が削れ、左右とも同じ水量の流れとなり、そして最後に2つの流れの間の大岩が崩れ落ちてしまったと考えられます。冬季の凍結も大岩の崩壊に関係しているのかも知れません。もう昔のように、滝つぼの全体をのぞき込むことはできなくなってしまいました。山の大きな変化を、こんなにはっきりと知ることはあまりないことです。そのうち水の流れに削られて、滝の落ち口へも簡単に行けなくなってしまうかも知れません。昔、同行した皆さんに、まだ見たことがない方々に、3枚の写真で紹介します。

1987. 8. 8加賀禅定道、滝展望台から

八ヶ岳(赤岳)登山

4期　佐藤　秀紀

知人のH氏から一度八ヶ岳山麓清里近くにある別荘に来ませんか，とお誘いを受けていた．せっかく行くのなら，八ヶ岳に登って，別荘におじゃましたいと考え，9月の連休を利用して出かけることにした．八ヶ岳は多くの峰からなる山塊の総称であるが，通常八つの峰は南八ヶ岳といわれる主峰赤岳(2899)を中心とした険阻な岩稜を連ねる連峰をいうようである．今回選んだルートは，諏訪湖側のJR茅野駅からバスで美濃戸口(1490)まで入り，そこから6合目ぐらいにある行者小屋(2340)まで登って一泊し，翌日地蔵尾根を登って横岳と赤岳の稜線に出て，赤岳山頂に至り，その後反対側の県界尾根を下って清里に出る，という八ヶ岳主峰赤岳横断コースということになる．コース選定に当たっては下りを赤岳から清里への二つの尾根，新教寺尾根と県界尾根のどちらをとるかを悩んだが，インターネットなどの種々の体験記なども参考にして，少しでも安心度が高いように思え，時間も短い県界尾根を選んだ．いずれも頂上からの岩場はかなり厳しいようである．高いところにあまり強くないので天候が悪化した場合は美濃戸口の方へ戻ることも考えた．

9月18日

5:27金沢を特急「しらさぎ」で出発．7:28米原で新幹線に乗り換え，7:56名古屋着．8:28特急「しなの」で名古屋発．10:37中央線塩尻着，11:00鈍行に乗り換え11:40茅野に着く．

食事をと思ったが適当な店がなく，12:10バスに乗り，12:55終点美濃戸口につく．かなり登った感じである．終点にある八ヶ岳山荘にてカ

レーライスを食べ，登山届けを書く．

13:30，林道を歩き始める．ほぼ平坦なカラマツ林の林道を 30 分歩くといくつかの山荘を通って，最後の美濃戸山荘に着く．ここまでは自動車が入れる．少し雨が降り始める．雨具を着けて．いよいよ本格的な山道の南沢を行者小屋に向けて登り始める．それほど急登はなく谷川の流れに沿って霧雨気味の山道を歩いて，16:00，行者小屋に着く．歩き始めて 2:30．小屋の前にはテント場もあり，かなりの人が小屋の前のテーブルで食事をしたり，ビールを飲んだりでにぎやかである．受付を済ませると寝る場所に案内された．２階の屋根裏で寝る場所としては十分広い．早速下に下りてテラスで生ビール(800円)を飲み，持ってきたブランディで水割りをつくり，ガスで上がみえない山を眺めながらのんびりと飲む．

食事は６時くらいから始まる．食事時には隣にやすむことになった人や見知らぬ人達と四方山の話をしながらひと時を楽しむ．明日の天候が心配だ．７時過ぎには布団に入り，寝てしまった．夜半目が覚めたが，朝方比較的熟睡感で起きることができた．

９月１９日

5:30 より食事．トイレ（水洗できれい）を済ませ，6:25 出発．ガス．小屋の後ろから登り始める．アルミ階段や鎖場があるがそれほど強い緊張感はなく，7:11，稜線の地蔵の頭に出る．かなり登山者は多く，降りてくる人に多数出会った．風は強く，依然としてガスで視界はほとんどない．7:15 展望小屋に着く．小屋で電話が利用できるかたずねるが，駄目ということ．小屋で少し休憩してガスの中を頂上へ向かう．途中，急登の鎖場があるがガスで周囲が見えないこともあり，それほど緊張感は覚えず．山頂小屋を通って，7:56 赤岳山頂に至る．登りはじめより，1:30．ガスで何も見えず，風強し．写真だけとってもらい早々に山頂小屋に入って休憩する．山頂小屋にはカード式の電話があり，迎えにきてもらう知人に連絡する．小屋で熱いコーヒをもらって暫し休憩する．小屋の窓から見えるものはただ白いガスばかり．休憩のみ２００円とあった．

9:05 山頂小屋を出発．いよいよ問題の県界尾根の下りである．鎖場が連続する．ガスで下のほうが見えないのが幸いである．途中で鎖場が途切れるところがあり，これで岩場は終わりかと思ったが，そう甘くはなく，さらに長い鉄梯子，そしてかなり長い鎖場があった．霧雨で岩場がぬれていることもあり，三点支持に注意しながら慎重に下る．約１時間２０分，10-6 と記した標識に至ってようやく岩場は終わる．頂上小屋で仕入れた缶ビールを飲んで一休みする．こちら側のルートはほとんど人が通らない．その後ダケカンバ，オオシラビソの樹林帯の山道になる．途中にオオシラビソの枯れた木が多く見られるところがあり，行く手下方向にはじめてガスがはれて稜線と小さなピークが見えた．11:20 小天狗というところか，10-4 とかかれた標識と

清里分岐の標識のあるところに至る．しばらく休憩．分岐と書かれているのに，分岐道らしいものが見えないので，いま少し下ってみるが分岐はわからない．元に戻り，標識の裏あたりをみると何か谷側に下る道らしきものがありそうな気配である．しかし，明確な道ではない．ここで，もう少し慎重に元の道をさらにしばらく下ってみればよかったのであるが，分岐と書いてある標識にまどわされて道を間違ってしまった．もう少し丁寧な標識が必要である．11:40 明確ではないが道らしいものを少し下がると，缶詰の空き缶らしいものなどが落ちている．やはりこれでよいのかと思いながら少し下るとかなり下まで瓦礫で埋まった開けた斜面に出た．道を間違えたように思ったが登り直すのはしんどいし，これを下れば結局谷川にでて，それを下れば登山口に出るはずだからとどんどん下った．.最後は笹薮をやぶこぎして，谷川の堰堤までようやく出た．堰堤が続くがその横に工事用の以前の道らしいものがあり，それをどんどん下って，12:22 ようやく本当の登山口までである．休憩．ここで，下から上がってきた犬をつれた中年夫婦と出会い，小天狗までの時間を聞かれる．下りで出会った人達はこれ以外に二組である．これからの道は広く堰堤に沿って下る．川を渡って 12:53 自動車道路にでる．車道を歩いて，サンメドウススキー場レストハウイスに 13:09 到着．ここより，知人に電話して迎えに来てもらう．その間，ワイン小瓶を買って長かった今日の山越えの無事を独り祝った．